

理系思考 分からないから面白い

元村有希子 著
(毎日新聞科学環境部記者)

教育基本法が改正され、教育の振興に関する施策を計画的に推進するため「教育振興基本計画」が策定されることになった。策定に当たり「基本的な考え方」と「重点的に取り組むべき事項」の案が纏まり、平成19年12月に素案として公表された。しかし、当該文面には「理科・科学離れ」に対する改善策は皆無で、関係者には国是となっている「科学技術創造立国」構想実現に対する危機感を募らせている。また、文中には「知識が社会・経済の発展を駆動する知識基盤社会」などと、単なる知識のみが社会を駆動し、ものづくりなど体験軽視の方向へ向かうのではないかと心配を抱かせる表現もある。

この様な折、理科や科学のおもしろさと共に経験や体験の大切さを説き、ベストセラーとなっているのが本書である。出版は毎日新聞社であるが、毎日新聞は毎日曜日「理系白書」と言う紙面を構成し、科学に関する話題を提供すると同時に、理科・科学教育に対する主張を掲載してきた。筆者は当該紙構成のキャップとして活躍していた記者である。

現在は、新聞社の科学環境部に所属する筆者であるが、学生時代を含め新聞記者になっただけから、国語大好き理科嫌い、理論より感性、理屈より直感で生きてきたと自負する文化系人間であった。ところが、ノーベル賞受賞者である小柴昌俊氏に出会い、彼の言う「幽霊素粒子」

つまり「ニュートリノ」との遭遇が理系人間への転機となったのである。地下深く掘った巨大水槽に純水を満たしたカミオカンデと呼ばれる水槽を、偶然突き抜ける素粒子をキャッチするアイデアに驚くと共に、「この研究は何の役にも立たないがロマンがある」と言う氏の言葉に洗礼を受けたとのことである。

本書は、筆者が「理系白書」と同時に担当してきた毎日新聞のコラム「発信箱」に掲載してきたものを系列ごとに並び替えたり、解説を加えるなどの加筆を施した文章で構成されている。

特に子供たちの理科離れに対しては、授業時間数の減に加えて実験・観察に必要な器具も満足に準備できておらず、予算も激減している現状に触れ、これでは「理科離れ」ではなく行政による「理科離し」であると断じるなど歯切れがよい。このことは、ものづくりの大切さを国が認めながらも、そのための施設・設備に充当する予算を国が削減している現状とも符合している。

コラム一遍が約650字程度に纏められており読みやすい。是非一読していただきたい一冊である。

(毎日新聞社, 349頁, 1,500円)
(毛利 昭)

もくじ

- 1 理系と文系のあいだ (科学技術を鍛える 作る人・使う人 ほか)
- 2 未来の住みごころ (二一世紀の予言 先端技術の節度 ほか)
- 3 科学記者の現場 (役に立ちますか? 「家族」を残して ほか)
- 4 女は科学にむかないか (「なんとかせい」 少子化と迷信 ほか)
- 5 科学大国はどこへ (マタイ効果 脱「ではのかみ」 ほか)